

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

へいせい ち しんかん えまき ほ けきょうさつ し
平成知新館2F-1(絵巻)に展示されている「法華経冊子」について勉強してみよう。

小さな冊子に 思いを馳せて

みなさんが文字を記したり絵を描いたりした一片の紙、それはもしかすると何百年の後に伝えられるのかもしれませんが。ご紹介するのは、今から約900年前の昔より伝えられてきた、小さな冊子です。(図1)

ページをめくっていくと、漢字を記したさまざまな色の紙が現れます。記されているのは、『法華経』という仏教のお経です。『法華経』は数あるお経のなかでもとくに重視され、広く親しまれてきました。鳩摩羅什という人が漢訳した全8巻のうち、この冊子は巻第5の一部を書き写しています。

よく見ると、紙には字の下に文様が表されています。お見せしているページには、イメージ図(図2)のように、菱形で囲んだ花の文様を、間隔を空けて繰り返し、それぞれの間にもまた花と唐草を配しています。直線と曲線を組み合わせて、優雅な文様を織りなします。

版木を使って多種の文様を摺り出したこうした紙のことを唐紙といい、貴族たちが和歌などを記すのに好んで用いました。普通の真っ白な紙ではなく、文様や絵のある紙をつかうとき、すこし嬉しくなるのは私たちと同じです。しかも唐紙は、当時あこがれの先進国、中国からの高級な輸入品です。この冊子の紙も中国(北宋)製と考えられていますが、当時の人はたまらない魅力を感じていたのでしょう。ちなみに、唐紙という名前は、当時の人々の多くが中国のことを「唐国」と呼んでいたことから付けられているのです。(ただし、唐紙はのちに日本でも製造されるようになります。)

さて、80ページあるこの冊子の中で、11ページ分だけ、字の下に文様ではなく人物や背景のある絵を描いているところがあります。これらは日本で描かれた絵ですが、今回はそのうちもっとも華麗な場面をご覧くださいませ。(裏面図3)

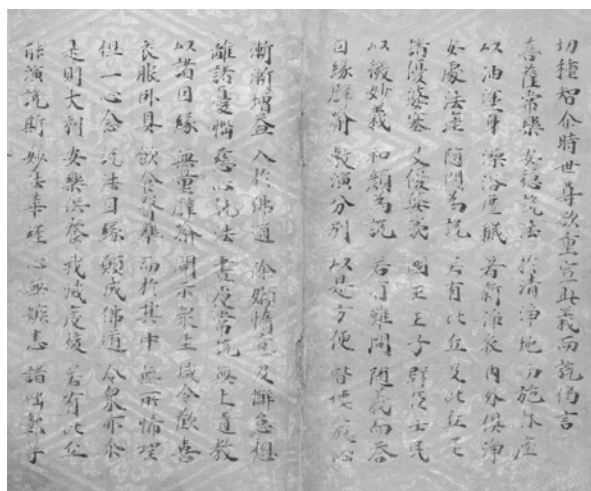


図1 重要文化財 法華経冊子(38・39ページ) 個人蔵



図2 イメージ図



図3 重要文化財 法華経冊子(34・35ページ) 個人蔵

描かれているのは、どこかの邸宅の室内の様子。手前と奥の部屋を区切る襖が開いて、ふたりの女性が向かい合っています。彼女らは十二単とも呼ばれる装束の裾を畳の上にとっぷりとなびかせ、長く豊かな黒髪を滑らかに流します。手前の部屋の女性は、後ろ姿で顔が見えませんが、その美しさを想像せずにはられません。奥の部屋に居る女性は、面長の顔を傾けて、視線を少し下に落としているよう

です。どんな気持ちを抱えているのでしょうか。また、右側の襖の裏から、このふたりのものではない黒髪と衣が少しだけのぞいています。この場には、もうひとり女性がいるのかもしれませんが。

なお、画面左下には、漆塗りの二階厨子という戸棚や、理髪用具などを収める打乱筥、香をたきしめるのに用いる火取香炉が据えられています。

この絵がどういう場面を描いているのか、実はまだよくわかっていません。何か基になる和歌や物語があるのか、冊子に描かれた他の絵と関係があるのか……はっきりした答えは見つかっていません。しかし、美しい姫たちが穏やかなひとときを過ごす、そんな情景であることは確かでしょう。

この冊子がつくられたのは平安時代の後半期。富を得た貴族たちが、宮廷を中心とした生活のなかですぐれた文化を育みました。彼らに仕えた女房らも知性や感性を磨き、美を洗練させていきます。

いっぽうで、当時は仏の教えが廃れ、末法という時代に入ったと考えられていました。じっさい、相次ぐ災害や戦乱に悩まされていたため、貴族たちは救いを求めて『法華経』などを書き写し、功德を積もうとします。とくに巻第5は、悪人や、罪深いとされていた女性も成仏できると説いており、法華経信仰は支持を広げました。

貴族たちは経文を記す紙を美しく飾る(荘厳する)ことで、祈りの力を強くしようとなりました。優雅な文様を表した高級な唐紙で、絵の具をふんだんに使って絵を描いたこの冊子も、そこに『法華経』を書写した誰かの切実な祈りが込められています。もしかすると、邸内に過ごす姫たちの情景こそ、その誰かが平穏への願いをこめて描かせた絵なのかもしれません。

この小さな、ささやかな冊子のページをめくっていくと、美を楽しみ、救いを願った人々が、遠い過去にゆらした心の襞に触れるような気がします。

(企画室 井並林太郎)